

ずいそう

## 幼い頃の博打の思い出

古川 恒雄



### 1. 思い出

実は私、小学校に上がる前からパチンコや競輪に親しんだ。

育った町は、福岡県久留米市国分町で、今は弟が住んでいる我が家は、旧陸軍48連隊の敷地から200メートルほどのところにあった。その昔、国分寺があった町だ。戦後、その48連隊(当時の通称「ヨンパチ」)は、暫くは九州大学の分校や、久留米第六中学校として使われていたが、朝鮮戦争の激化に伴い、警察予備隊が置かれ、それが保安隊となり、今の自衛隊となった。

当時、若い隊員たちが隊列を組み、歩調を合わせて「保安隊の歌」を大声で唄いながら、通りや川の土手を行進したり駆けたりしていた。一節歌い終わると、指揮官から「声が小さ〜い!!」と叱咤激励されながら唄っていたことも、懐かしく思い出される。

そうした時代背景があって、我が家の裏山には久留米競輪場が建設され、商店街には、夜の飲食店と共にパチンコ店が何軒か開店した。

ところで、私が幼い頃、近所には幼稚園などはなかった。いや、そのようなものがあることすら知らずに育った。遊びたい時は、友達の家に行って「○○ちゃん、遊ば!」と声を掛け、晴れた日は外の道路上か空き地で、雨の日は当然家の中で遊んだ。小・中学生たちが学校から戻ったら、上は中学生から下は幼児まで、空き地や道路で一緒に夫々何かをして遊んでいた。いや上級生が、幼子も入れて遊んでくれていた。

パチンコの話をするが、そうした小・中学生がまだ学校に行っている間に、遊びに飽いた我々幼子たちは、連れ立ってパチンコ店に度々行った。パチンコ店に入りするのが悪いことだとは、なんとなく知ってはいたが、後ろめたい遊びをするのも魅力的であった。昼間の早い時間だから、開店していても客はパラパラしか居らず、我々は店内の床に落ちている玉を拾って遊んだ。今と違いパチンコ台には椅子などないので、背伸びしてパチンコ台の穴に入れ、レバーを弾いて、玉が釘の間を駆け巡るのを、目と耳で楽しんで遊んだものである。店員から、特別とがめられた記憶はない。当時は、ガラス板の内側に、10か25とかの数字が書

かれたポケットがあるだけの、所謂チューリップなどない、単純なパチンコ台であった。そんな訳で、幼児時代にパチンコに親しんだとは言っても、賭博をしたのではない。可愛いものである。

次に競輪だが、我が家の裏の山に、当時「忠霊塔」と言っていた場所があった。

第二次大戦以前の戦死者の慰霊碑で、全国各地にあるはずだ。その塔を取り囲むように、久留米競輪場は建設された。子供の足で20分も歩けば着く競輪場には、競技開催とは関わりなく、週に1回程度、友達と行っていた。

周りの藪には、紙鉄砲や水鉄砲、水中鉄砲、ゴム銃、チャンバラ用の材料の、竹や木が生えていたからでもある。

競輪開催日には、朝必ず、ドドーンと数発の花火が上がる。その花火の火薬玉の殻、ワンガラを藪の中に見つけるのも、楽しい遊びの一つだった。いつも、小高い崖の上から競技を見物していた。競技の最終の周回を知らせる鐘がカンカンカンと鳴り響くと、目を凝らして、どの選手が一等になるかを眺めていたが、何度も通っていると、どの選手がトップになるか、ある程度当てることが出来るようになっていった。

レースが始まる前に、顔見世のためにトラックを1周する時に、予想するのだ。当時、選手の顔見世の周回で走る姿から判断し、かなりの率で当てていたことを覚えている。

そのコツは、秘密だが、今でも使えると思う(笑い)。我が家の近くには、競輪選手の家も何軒かあった。どの選手の家も、周りの家々とは1ランクも2ランクも上の立派な家で、周辺の子供たちにとって、今のJ1サッカー選手みたいなものだった。当時、「競輪選手は1日に10個も生卵を食べるらしい。」とか、噂をしていた。食料も乏しい当時の子供たちは、運動会の日、やっと生卵を食べさせてもらえる程なので、生卵を毎日10個の競輪選手は、憧れの職業であった。

### 2. パチンコの不思議

ところで、パチンコは法的には「博打・賭博ではな

い」そうだが、何故そうなのか今も私には理解できない。出した玉はパチンコ店内では換金はできないが、外では換金できる。大学生になってからよく行った。換金する場所へは、価値のありそうにもない、何度も使い回され、傷もある換金用の品物を持って行くがちゃんと換金できた。

記憶では、その換金所は、パチンコ店から1筋も2筋離れた路地裏の寂れた通りにあった。いかにも秘密めいた雰囲気、仕舞屋風の家の壁に小さな窓口があって、中に誰がいるのかも判別できないほどの暗い室内から、現金を持った手だけが出てきて換金してくれた。だから、換金している現場を、警官などに現行犯で逮捕されてもおかしくない雰囲気に溢れていた。

理屈としては、パチンコ店で得た玉を一旦品物に換えて、全く別の業者に買い取ってもらうとすれば、パチンコは賭博ではないと言い張れるのかもしれない。しかし、パチンコ店が渡す換金用の品物に、そんな価値があるとはとても思えないし、恒常的に行われていることも賭博ではないと言い張るには異様である。ところが、今ではパチンコ店と同じ建物の中にも、その換金所があるようだ。いや、ある。実に堂々と、おおびらに換金している。

九州博多駅前のパチンコ店がその一つである。しかもあらぬことか、その換金窓口の正面には交番まであった。その現状を見つけた時、私は目を疑った。だから、この換金所は交番からは目障りなので、その内どこかへ移転するだろうと、私は予想していた。

ところが、結果を見て私は更に仰天した。換金所はそのまま残り、交番がどこかへ行ってしまった。(え〜!!) そこまで、見て見ぬフリするか。まさに、パナマ文書の租税回避地、すなわちカリブ海に浮かぶバージン諸島やケイマン諸島と同じではないか。租税回避地ならぬ「賭博罪回避」のパチンコ換金の仕組みは、言い逃れの域を出ず、博打で得た金のマネーロンダリングである。パチンコをしたことのある国民で、「パチンコは賭博ではない」と思っている人は一人としないのではなからうか。しかし、パチンコの換金で逮捕された事件は、寡聞にして知らない。

最近、賭博に関係して、オリンピック代表候補のバドミントン選手やプロ野球選手たちが逮捕され、賭博に対して、悪であるとの世論は厳しい方向に向っているのに。不思議である。

### 3. 公営ギャンブルの改善策

賭博は人をのめり込ませ、人生を台無しにしてしまう危険性がある一方、公営の賭博は、収益の一部を公益的な目的に使っている。私は、それだけではなく、賭博に使われている物の有用性が必要だと考えている。その点、競輪、競艇、オートレースは、使用される機械の開発に大いに貢献している。これらの機械は、国民生活において日常頻繁に使われ、有用・不可欠な機械である。公営ではないが、パチンコも、機械やソフトの開発に相当貢献していると推測する。

その点、競馬の馬は、問題がある。馬は、日本人の生活には使われなくなった。昔は、農耕、運搬に、日常的に、また軍馬として、盛んに使われていた。ただ、競馬は競馬用の馬の開発にしか、役に立っていない。日本人には、ペットとして盛んに飼われるようになった犬の方が、身近である。だから競馬を止めて、競犬、ドッグレースの方が、良いのではないか。「西欧諸国では、紳士淑女の嗜みであり、競馬場は社交の場である。」とか、「競争馬は姿が美しい、芸術である。」と言う人もいるだろうが、乗馬の習慣も殆ど無い日本人が、西欧人の真似をしなくても良いのではないか。また「犬の姿も美しい。その走る姿は芸術である。」と言いたい。

再びパチンコの話に戻るが、パチンコは私企業が経営しているので、収益が公益的な目的には使われていない。この点を改良すれば良いのではないか。

最近、カジノを許可して、大々的に海外の観光客の呼び込みに使おうと言う気運が高まっている。この機会を捉えて、パチンコも公営にしたら如何だろうか。パチンコはスロットマシンに似ている。ただ放り込む玉が、球形かコイン形であるかの違いと、勝敗が決まるまでの複雑さの違いであろうか。世界の中で、パチンコを好むのは日本人だけなのかもしれない。でも、是非パチンコも公営にして、その面白さを漫画と同様、世界に広め、その利益の一部を、財源が不足がちな福祉などに回せば、一層メリットが増すのではないだろうか。